様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

科学研究費助成事業　研究成果報告書

平成２６年６月４日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2011～2013
課題番号：23320071
研究課題名（和文）　近代ロシア文学における「移動の詩学」

研究課題名（英文）　The Poetics of Movement in Modern Russian Literature

研究代表者
諫早　勇一（ISAHAYA, Yuichi）
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：80011378
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）6,500,000円　、（間接経費）1,950,000円

研究成果の概要（和文）：19 世紀ロシア文学はドストエフスキイやトルストイの文学にみるように、プロットの面から「移動」と密接につながっているばかりでなく、時空間感覚を含めたその表現においても「移動」と切っても切れない関係にあった。本研究では、19 世紀ロシア文学だけでなく、20 世紀ロシアの文学・芸術、さらには中東欧の 20 世紀文学も視野に収め、「移動」の果たした役割を再検討して、「移動」は文学表現において重要な位置を占めるだけでなく、視点という問題を介して、文学とそれ以外の芸術とを結びつける重要な要素であること、亡命・越境のような 20 世紀の大きな文化現象を表象するためのキーワードであることを確認した。

研究成果の概要（英文）：As seen in the works of Dostoevsky and Tolstoy, the 19 century Russian literature was tightly connected with Movement not only in the aspects of plots, but also in its representation, including senses of time and space. Our studies have reconsidered the roles of Movement, taking into consideration not only the 19 century Russian literature, but also the 20 century Russian literature, the 20 century Russian arts and the 20 century literature of Central and Eastern Europe. And we have confirmed that Movement played the important role in connecting literature with other arts by means of points of view, and that Movement is a key word for representing huge cultural phenomena of the 20 century, such as emigration or border transgression.

研究分野：　人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：　近代ロシア文学、移動、亡命、時空間感覚、モダニズム、中東欧文学、芸術

１．研究開始当初の背景

（1）荒漠たるロシアの大地を背景にしたロシア文学において、「移動」の概念は 18 世紀末のラジーシチェフ以来、19 世紀後半の「鉄道小説」ともいうべきトルストイの『アンナ・カレーニナ』、ドストエフスキイの『白痴』において頂点を極めるまで重要な地位を占め続け、これを論じたすぐれた研究を生み出してきた。

（2）一方、20 世紀初頭のモダニズム文学や革命後の亡命文学においても「移動」のテーマは新たな展開を見せ、「移動」という空間概念はしばしば時間の推移に置き換えられているが、こうした 19 世紀・20 世紀のロシア文学に見られる「移動」の概念をトータルに捉えようとする研究は、これまでほとんどなかった。

（3）こうした認識から本研究では、19 世紀・20 世紀のロシア文学を「移動」をキーワードにして総合的に捉えなおし、テクノロジーの進歩が文学・芸術における知覚や表現に及ぼす影響、「移動」というプロセスが文学・芸術作品の中で前景化されることの意味の探究を基礎に、幅広いパースペクティヴを備えた「移動の詩学」を構築したいと考えた。

（4）そして、本研究を実り多いものにするために、越境・亡命という視点からも共通点

が少なくない中東欧文学をも視野に収め、20世紀の思想状況を読み解くために、文化・芸術理論も積極的に援用しようと努めた。

２．研究の目的

（1）1837 年に初めてロシアに開設された鉄道によって従来のスピードの概念は一変し、移動時間の縮小は空間知覚の変化につながって、時空間の文学的描出にも大きな変化をもたらした。本研究では技術革新による「移動」概念の変化が文学的描出に及ぼした影響を、19 世紀ロシア文学を例に考察する。

（2）1851 年にペテルブルグ＝モスクワ線が開通して以来、鉄道はますます近代文学に欠くことのできないものとなり、移動空間は出会いの場として重要な位置を占めるようになった。しかし、移動空間は出会いの場だけにとどまらず、主人公の告白を煽り、想像力を歪める閉ざされた場でもある。本研究では19 世紀ロシア文学の分析によって、移動空間が人に及ぼす作用について考究する。

（3）20 世紀文学を考えるとき、「移動」は登場人物の現実把握に作用するとともに、作品の文学表現にも多大な影響を及ぼしたと考えられる。ここでは亡命者の文学などを「移動」と現実把握の観点から分析し、「移動」手段の変化・多様化が散文の文体にも反映していることを検証する。

（4）「移動」というプロセスを考えるとき、亡命者・難民を数多く輩出してきたロシア・中東欧諸国にとって駅や待合室のもつ「結節点」「滞留空間」としての価値は無視できない。ここではロシア・中東欧の亡命者やモダニストたちを比較しながら、「移動」のプロセスにおける駅・待合室という「滞留空間」の意味を考察する。

（5）19 世紀を代表する移動手段は鉄道だったが、20 世紀に入ると自動車・飛行機などさまざまな移動手段が登場して、アヴァンギャルドをはじめとするテクノロジー礼賛のなかで新たなモチーフとして注目を浴びた。ここではロシア・中東欧のアヴァンギャルド文学に見られるテクノロジー礼賛と「移動」手段礼賛との関係を考究する。

３．研究の方法

（1）共同研究を効率的に進めるために、縦軸として 3 つの時代（1．プーシキンからトルストイまで、2．チェーホフから亡命文学まで、3．ロシア・中東欧のモダニズム）を設定し、ゲストを含めた人員の配置を考えた。

（2）つぎに横軸として 3 つのテーマ（1．技術革新と移動の前景化、2．移動と時空間感覚、3．移動と文学表現）を設定し、縦軸と横軸を効果的に組み合わせながら研究を進めた。

（3）研究を進めるために、国内外の研究機関に出張して積極的に文献資料の収集に努めたが、今回は「移動の現場」にも積極的に赴いて、移動感覚を実体験することにも重点を置いた。

（4）年に 2 回程度研究会を開催して研究の進捗状況を確認しあったが、同時に「移動」にかかわるテーマを研究している若手研究者にもさまざまなテーマで報告をお願いし、研究の広がりを模索した。

（5）最終年度には『駅・ガレージ・格納庫』の著者で、近代ロシア文学における「移動」のテーマの先駆的な研究者であるユーリイ・レヴィング・ダルハウジー大学（カナダ）教授を招聘して国際シンポジウムを開催し、本研究にとって貴重なアドバイスを受けた。

（6）これらの研究成果は各自がさまざまな場で発表し、論文も掲載したが、最終年度の終わりには論文集「近代ロシア文学における「移動の詩学」」をまとめて、これまでの研究を総括した。

４．研究成果

（1）戦間期ベルリンにおける亡命者とソヴィエト・ロシアからの一時的移動者の都市イメージを分析した結果、ベルリンの見える鉄道とロシアの隠された鉄道という差異が彼らのイマジネーションを刺激し、モダニズム的なテクノロジー賛美とは異なった次元で創作の弾みとなっていることが明らかになったが、このことは都市の景観論に新たな視点を提供するものといえよう。

（2）19 世紀ロシア作家のロシア帝国内移動を題材に、旅行・移住・調査・流刑・写真撮影などの体験が、知識人におけるロシア帝国の風土・人種文化的構成・住民の心性に関する認識とその表現にとって果たした役割を考究した結果、ロシア帝国の境界地域や辺境地域に関する認識やイメージのあり方が、作家の育む国家イメージとその表象の詩学に決定的な影響を持つことが解明され、境界地域や辺境地域の持つ意味に関して新たな視野が開けた。

（3）ロシア人として初めてノーベル文学賞を受賞したブーニンは国内外を頻繁に旅行したことで知られるが、亡命前の彼の東方旅行を扱った作品を分析すると、それが空間の

旅である以上に時間の旅であることがわかり、人類の歴史の黎明期と結びついた土地を訪れることによって、個々の命が伝え続けてきた単一の「生」を全存在で感じ取る体験だったことが確認できた。これは移動と時空間感覚との結びつきについて新たな知見をもたらすものといえよう。

(4) 19 世紀ロシア文学における「馬車」のイメージについてプーシキンを例に考察した結果、それは人物の出会いや作品の意外な展開の契機のように、プロット面で大きな影響を及ぼしただけでなく、長距離の移動によって彼が民衆の口語に親しんだため、従来の言語論を統合発展させた新たな標準語の創造が可能になったように、言語的な面でも無視できない役割を果たしたことが明らかになり、「移動」のもつ新たな側面が見えた。

(5) レーリヒ、マンデリシターム、ベルゴーリツなど、20 世紀のロシア（ソ連）で時空間の移動を創造の核としていた知識人の言説を、思想的背景と異文化に対する対応を軸に考察した結果、世界認識・他者観が彼らの属する文化の文脈によって強く規定されていることが判明し、「移動の詩学」における固定的要因の重要性が明らかにされた。

(6) 19 世紀後半以降、移動手段の発展によって、文学においても、これまでの固定された視点による視覚から、移動的な視覚が優勢になったことに注目し、それが他の芸術とどうかかわっているかを分析した結果、とくに映画との密接なつながりが確認されたが、視覚をもとに諸芸術を考えることは今後さらに発展されてよいテーマだろう。

(7) 亡命ロシア人を両親に持ち、チェコ語で執筆する作家ミハル・アイヴァスの小説における「移動」について、作家本人へのインタビューも含めて研究を進めた結果、彼の作品において「移動」はポストコロニアリズムやエキゾティズムといった一面的なものではなく、「まなざし」および他者との関係という点において現象学的な視点の産物であることが明らかになり、現代中東欧文学を見る新たな視野が開けた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 35 件）

① Юити Исахая、Берлин: городской пейзаж с железными дорогами、近代ロシア文学における「移動の詩学」(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、2014、134 - 141
② 望月哲男、境界を越える写真、境界研究、査読無、特別号、2014 年、1－17
③ イリーナ・メリニコワ、望月恒子、ヴェルチンスキーと彼の歌について―ロシア文化とソ連文化の架け橋、近代ロシア文学における「移動の詩学」(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、2014、11－31
④ 望月恒子、詩人ネスメーロフのウラジオストク生活と亡命、境界研究、2014、特別号、121 - 131
⑤ 鈴木淳一、ブゥルツェフ、ヤクート英雄叙事詩とユーラシア諸民族の口承文学、札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」、査読無、第 79 号、2013、172 - 189
⑥ 鈴木淳一、ジダーノフ V.、日本におけるパウストフスキー、パウストフスキーの文学遺産と世界文化、査読無、2013、31－36
⑦ 中村唯史、事実と記録のあいだ：ロシア/ソ連ドキュメンタリー映画をめぐる言説と実践について、映像の中の冷戦後世界（山形大学出版会）、査読無、2013、11－26
⑧ 中村唯史、マイトレーヤとレーニンのアジア：無国籍者レーリヒの世界図、ユーラシア地域大国の文化表象（ミネルヴァ書房）、査読有、2014、198 - 223
⑨ 中村唯史、地中海からアラギョーズへ：マンデリシタームの詩学とアルメニア、ロシアの南：近代ロシア文化におけるヴォルガ下流域、ウクライナ、クリミア、コーカサス表象の研究（山形大学人文学部叢書）、査読有、第 5 巻、2014、129 - 184
⑩ 大平陽一、カレル・タイゲにおける構成主義的なるもの―ピュリスムから構成主義へ、構成主義から機能主義へ―、アゴラ（天理大学地域文化研究センター紀要）、査読無、特別号、2013、1－52
⑪ 阿部賢一、「言葉」についての「言葉」――社会主義期の文化を語るために、チェコの映画ポスター、査読無、2014、5－8
⑫ 阿部賢一、ミハル・アイヴァスの小説における「移動」について、近代ロシア文学における「移動の詩学」(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、2014、1－10
⑬ 諫早勇一、異境のモスクワ芸術座―モスクワ芸術座プラハ・グループと女優マリア・ゲルマノワ、辺境と異境―非中心におけるロシア文化の比較研究、査読無、No.3、2012、1－11
⑭ Tetsuo Mochizuki、Nonviolence by Tolstoy & Gandi: Toward a Comparison through Criticism、India, Russia,

China: Comparative Studies on Eurasian Culture and Society, Comparative Studies on Regional Powers、査読無、No.11、2012、149 - 169

⑮ Tetsuo Mochizuki、How Literature Tried to Master the Landscape: Literary Expedition along the Volga in Pre-reform Russia 、 Imaging the Landscape: Views from Armenia and Japan, Comparative Studies on Regional Powers、査読無、No.12、2013、27－41

⑯ Цунэко МОТИДЗУКИ 、«Россия» и «русское» в романе И.Бунина «Жизнь Арсеньева»、 辺境と異境―非中心におけるロシア文化の比較研究、査読無、No.4、2012、16-24

⑰ 鈴木淳一、ロシア学の現状瞥見、札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」、査読無、第 78 号、2013、171 - 186

⑱ 中村唯史、1910 - 20 年代のエイヘンバウム：フォルマリズムとの接近と離反の過程、スラヴ研究、査読有、59、2012、25－59

⑲ Накамура Тадаси、Заполнить небо над Аустерлицем: взгляд М.Бахтина на Л.Толстого、査読無、VII、2013、289 - 296

⑳ Накамура Тадаси 、О пейзаже в японской культуре нового времени、Imaging the Landscape: Views from Armenia and Japan, Comparative Studies on Regional Powers、査読無、No.12、2013、69-79

21 大平陽一、ヤーコブソンの構造詩学とロシア・フォルマリズム（あるいはポスト構造主義）、アゴラ（天理大学地域文化研究センター紀要）、査読無、第 8 号、2012、87 - 106

22 大平陽一、タイゲとヤーコブソン―言語観・芸術観の類似と差異―、西スラヴ学論集、査読有、第 15 号、2012、89 - 110

23 大平陽一、移動的視覚に関する走り書き的覚え書、アゴラ（天理大学地域文化研究センター紀要）、査読無、第 10 号、2013、1－14

24 大平陽一、カレル・タイゲの構造主義理論に温存された美、アゴラ（天理大学地域文化研究センター紀要）、査読無、第 10 号、37－47

25 阿部賢一、切断される四肢、あるいは世紀末のウィーン、ユリイカ、査読無、第 45 巻第 4 号、2013、85 - 90

26 諫早勇一、ナボコフと大脱出―脚色から虚構へ、書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ（研究社）、査読無、2011、261 - 269

27 Юичи Исахая、Набоков и молдые пражские поэты 、 Набоковский сборник、査読有、2011/1、2011、43－48

28 望月哲男、19 世紀ロシア文学のヴォルガ表象―アポロン・グリゴーリエフ『ヴォルガをさかのぼって』を中心に―、境界研究、査読有、No.2、2011、65 - 83

29 望月哲男、三つのヴォルガ像：1856 年の文人調査旅行から、スラブ・ユーラシア研究報告集：文化空間としてのヴォルガ（科学研究費補助金研究成果報告書）、査読無、第 4 号、2012、69 - 104

30 TSUNEKO MOCHIZUKI、Женскость и материнство в романе «Казус Кукоцкого» Людмилы Улицкой、Wielkie tematy kultury w literaturach słowiańskich、査読無、第9巻、2011、417 - 421

31 鈴木淳一、V.ジダーノフ、チェーホフの日本における親和性、札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」、査読無、第 75 号、2011、87 - 115

32 中村唯史、「ソ連文学」史の書き替え――帰還、奪冠、揺らぎ、ロシア文化の方舟ソ連崩壊から二〇年（東洋書店）、査読無、2011、112 - 120

33 中村唯史、ゴーリキーの自伝的作品におけるヴォルガの印象の薄さについて、スラブ・ユーラシア研究報告集：文化空間としてのヴォルガ（科学研究費補助金研究成果報告書）、査読無、第 4 号、2012、119 - 126

34 Накамура Тадаси 、Восприятие Л.Толстого натуралистической школой Японии、Россия и Япония: гуманитарные исследования、査読無、2012、123 - 133

35 阿部賢一、「居酒屋（ホスポダ）」という空間と小説の語り、バッカナリア『酒と文学の饗宴』（成文社）、査読無、2012、121 - 144

〔学会発表〕（計 17 件）

① Юити Исахая 、Берлин: городской пейзаж с железными дорогами、「移動の詩学」の可能性を求めて（科学研究費補助金 2013 年度札幌研究会）、2013 年 5 月 2 日、北海道大学

② 諫早勇一、「亡命」文化再考、日本ロシア文学会関西支部 2013 年度秋季研究発表会（招待講演）、2013 年 11 月 16 日、京都大学

③ Тецуо Мотидзуки、Тени иезуитов в романе Достоевского、XV Symposium of the International Dostoevsky Society、2013 年 7 月 9 日、Дом русского зарубежья (Moscow, Russia)

④ Тецуо Мотидзуки 、Сравнивая несравнимые: Из опыта сравнительного исследования культур Евразийских стран 、Fifth East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies «1913-2013 for Eurasia: A Great Experiment or a Lost Century?»、2013 年 8 月 9 日～10 日、大阪経済法科大学
⑤ Мотидзуки Цунэко 、Юбилейная конференция «Современная рецепция творчества И.А.Бунина»、2013 年 11 月 26 日、国立ヴォロネジ大学（ヴォロネジ市、ロシア）
⑥ ジダーノフ V.、 鈴木淳一、ロシア国民思想の神話創造的探究、日本ロシア文学会第 63 回大会、2013 年 11 月 2 日、東京大学
⑦ 鈴木淳一、ジダーノフ V.、ユーラシア思想としてのクゥラコフスキーの民族思想の方法論、セミナー「ユーラシア民族思想のモデルとしてのクゥラコフスキーの民族思想」、2013 年 9 月 4 日、ロシア北東大学（ヤクート、ロシア）
⑧ 諫早勇一、隠された鉄道と目に見える鉄道：ロシアの街とドイツの街、「都市と交通の風景論」（科学研究費補助金 2012 年度鹿児島研究会）、2012 年 11 月 30 日、鹿児島大学
⑨ 望月哲男 、Ненасилие как анти-модернизм: Отклик Ганди на идею Толстого на фоне Русско-японской войны、近代文化：スラブと日本の対話、2012 年 8 月 29 日、ベオグラード大学（セルビア）
⑩ 望月哲男、Образ Волги: по поводу одной литературной экспедиции в дореформенной России 、Круглый стол «Читая ландшафт»、2012 年 9 月 12 日、アルメニア大学（ロシア）
⑪ 望月恒子、«Россия» и «русское» в романе И.Бунина «Жизнь Арсеньева»、Русская литература XX века в аспекте миграции и эмиграции、2012 年 7 月 14 日、北海道大学
⑫ 中村唯史、大戦間期の日本とソ連の文芸における「声」、日本比較文学会東北大会、2012 年 11 月 17 日、山形テルサ
⑬ 阿部賢一、ロマの声/ジプシーの音楽、地域研究資料をとりまく新たな波―デジタル化時代の課題と展望―、2013 年 3 月 22 日、京都大学地域研究統合情報センター
⑭ Tetsuo Mochizuki 、Nonviolence by Tolstoy & Gandhi: Toward a Comparison through Criticism、Comparative Aspects on Culture and Religion: India, Russia, China、2011 年 9 月 15 日、Bangalore (India)
⑮ Накамура Тадаси 、Восприятие Л.Толстого «натуралистической школой» Японии、Россия и Япония: гуманитарные исследования、2011 年 9 月 9 日 、Дальневосточный федеральный университет （ウラジオストック、ロシア）
⑯ 中村唯史、オリガ・ベルゴリツ『昼の星』に見る超克の論理、日本比較文学会 2011 年度東北大会、2011 年 12 月 3 日、福島大学
⑰ 阿部賢一、ヤーヒム・トポルの小説における〈移動〉の位相、日本西スラヴ学研究会、2012 年 3 月 15 日、北海道大学

〔図書〕（計 6 件）
① 諫早勇一、東洋書店、ロシア人たちのベルリン　革命と大量亡命の時代、2014、304
② 望月哲男（編）、ミネルヴァ書房、ユーラシア地域大国の文化表象、2014、274
③ Tetsuo Mochizuki、北大スラブ研究センター、Orient on Orient: Images o Asia in Eurasian Countries, Comparative Studies on Regional Powers No.13、2012、198
④ 望月哲男、ナウカ出版、「アンナ・カレーニナ」を読む、2012、89
⑤ 中村唯史、せりか書房、再考ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚、2012、225
⑥ 阿部賢一、人文書院、複数形のプラハ、2012、258

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
諫早　勇一（ISAHAYA YUICHI）
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：80011378

(2)研究分担者
望月　哲男（MOCHIZUKI TETSUO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：90166330

望月　恒子（MOCHIZUKI TSUNEKO）
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：90261255

鈴木　淳一（SUZUKI JUNICHI）
札幌大学・地域共創学群・教授
研究者番号：40179221

中村　唯史（NAKAMURA TADASHI）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：20250962

大平　陽一（OHIRA YOICHI）
天理大学・国際学部・教授
研究者番号：20169056

阿部　賢一（ABE KENICHI）
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：90376814

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：